第８回東海日本思想史研究会発表資料（2017年12月09日・愛知学院大学）

**司馬史観は史観たりうるか？**

**静岡県立大学　平山　洋**

**①　そもそも史観とは何か？**

１．デジタル大辞泉：歴史を全体的に把握し、解釈するときの基礎的な立場・考え方。歴史観。「皇国史観」

２．大辞林第３版：歴史を解釈する基本となる考えや態度。歴史観。例「唯物史観」

３．日本大百科全書：史観→歴史観

　歴史の見方を決めるもの。歴史家がある観点から事実を解釈するときの前提になる統一的な観念。歴史家はそれぞれ固有の歴史観をもっている。多くの事実のなかからあるものを選び出す選択基準、事実を意味づける価値観は歴史家によって異なる。それによって記述は個性的になるが、同時に偏りもおこる。いかなる歴史家も自分の先入観（これも歴史観）によって偏った見方をするが、その偏りやゆがみは、対象の事物についての定義や法則の知識（これも歴史観）に照らして修正できる。歴史家に主観的な見方をさせるのも歴史観だが、それを客観的にするのも歴史観である。

　しかしそれぞれの歴史家がもっている人間観、社会観、国家観、道徳観、宗教観、文化観、世界観などの違いからくる史実の解釈の相違は、容易に一致させることができない。歴史家が自己の立場から事実をどう解釈するかは自由であって、その解釈が史料によって実証され、論理的に整合する限り真である。歴史の真実はただ一つではない。しかしある時代に多くの人がほぼ共通にもっていた歴史観はある。古代ギリシアの循環史観、中世キリスト教の救済史観、近代啓蒙(けいもう)期の進歩史観、19世紀のナショナリズム史観などである。これによって史学史が形成される。

　また歴史観には、歴史の全体の叙述を組み立てる構想力や、歴史の大きな流れをつかむ直観力のようなものもある。歴史観の根底にはしばしば歴史哲学がある。［神山四郎］

→本発表は、史観を「歴史の見方をきめるもの」と簡潔に定義しつつ、いわゆる司馬史観は史観たりうるかについて探ることを目的とする

**②どのような史観があるのか？**

1. 神山が実例とするのは「古代ギリシアの循環史観、中世キリスト教の救済史観、近代啓蒙期の進歩史観、19世紀のナショナリズム史観」の４史観
2. 一般には「唯物史観」（進歩史観から派生）、「皇国史観」（19世紀のナショナリズム史観から派生）の２史観も使用されている
3. 1970年代以降に使われだした「司馬史観」、80年代以降の「自由主義史観」については、用語として確定していないと思われる

**③唯物史観・司馬史観・自由主義史観の説明**

1. 唯物史観

この史観はもともとマルクス主義学者が唱えていたものである。彼らは戦後、進歩派とか進歩的知識人などと呼ばれたために進歩史観とも呼ばれる。
　そもそもマルクス主義においては人間の歴史というものは未来に向かって常に進歩しているものだ、と捉える。原始共産制から始まり、封建制、絶対王政、資本主義、帝国主義、と続いて最後には暴力革命が起こり、共産主義に必然的に到達するのである。全世界が共産主義社会となったとき、人類の進歩はそれ以上は不要となり、貧乏人も金持ちもなく、人は誰に対してもやさしくなり、もちろん戦争などの争いごとはまったくなくなる理想社会が訪れるわけである。このマルクス主義の考えをベースにした進歩的史観は以下のようなものとなる。人間というものは歴史をさかのぼればさかのぼるほど悲惨な生活をしていた。たとえば江戸時代の庶民の生活は生きるか死ぬかのぎりぎりの生活を強いられていた。明治になってもこの傾向は変わらず、善良ではあるが社会構造の矛盾により貧乏生活を余儀なくされた庶民は相変わらず悲惨なな生活を強いられていた。
　明治の後半に日露戦争が勃発したが、その原因はいうまでもなく日本の帝国主義である。日本の侵略主義的発想が中国大陸への軍の派遣となった。したがって日露戦争は明らかに侵略戦争である。日露戦争後の歴史はさらに侵略主義的様相を深めたが、いうまでもなくその頂点は太平洋戦争である。あれも無論日本による侵略戦争である。そして太平洋戦争は一部の権力者が自らの体制を維持するために起こしたもの、と考える。庶民は戦争なんぞ望んでいない、戦争の責任は一部の権力者のみにある。なお、この考えは東京裁判を行った連合軍側の考えとも一致している。そのために進歩的史観はまた「東京裁判史観」とも呼ばれている。
　太平洋戦争が終わって後、やっと日本の近現代史は明るくなる。本当は昭和20年代に共産主義革命が起こり、天皇制も廃止にして欲しかったが、権力の横暴により残念ながらそれはならなかった。本当は革命が必要だったが、権力がそれを阻止した。そのために日本は資本主義社会であり続けることを余儀なくされている。以上が進歩的史観の骨子である。
　この考えは戦後の日教組の台頭とともなって、戦後の日本の教育界を大きく支配した。たとえば中学・高校の頃、日露戦争のことを習ったと思うが、その時に東郷平八郎や児玉源太郎、乃木希典といった日露戦争の英雄達の人名はあまり出てこない。彼らのことは重要視されていないのでる。その代わりに教科書に必ず出ていたのが与謝野晶子の有名な「君死にたもうなかれ」の反戦歌と内村鑑三の反戦思想である。
２．司馬史観

こうした戦後日本に支配的であった歴史観をくつがえしたのが司馬史観である。司馬遼太郎は特に明治の日本を明るく描いた。その司馬史観は以下のようなものである。
　日露戦争までの明治という時代は日本の歴史の中でもよい時代であった。明治維新により中央集権国家が確立し、富国強兵にはげみ、日本という国家は東洋の一小国から世界の列強に肩を並べるまでになった（ずいぶん無理もしたが）。確かに庶民の生活はまだまだ貧しかったが、それはマルクス主義者が考えるように支配階級が搾取をしていたためというよりは、日本の国富自体が少なかったのだ。乏しきを憂えず、等しからざるを憂える、という。皆貧乏ではあったが、国家を強くするために国民一丸となって頑張っていたのが日露戦争までの明治の時代であった。
　しかし日本の発展につれて特に当時極東に食指を伸ばしつつあったロシアとの対立は必然であった。当時の日本人は朝鮮半島が日本の生命線であると考えていたが、それは当時の国際情勢をみればやむを得ないことであった。いかにしても挑戦半島にロシアの勢力をいれてはならなかった。しかるにロシアは朝鮮半島に入ってこようとする。どうしてもこれと戦わざるを得なかった。したがって日露戦争は侵略戦争などではなく、防衛戦争であった。しかし日露戦争後に日本人は変質する。大国ロシアに勝ったおごりも相俟って調子に乗ってしまった。その象徴がポーツマス条約締結後に起こった日比谷焼き討ち事件である。そしてついに中国大陸にちょっかいをだすようになった。結局中国大陸に大きな利権を持っていたアングロサクソン（米英）と対立するようになり、太平洋戦争を始めてしまった。したがって太平洋戦争は侵略戦争である。すなわち日本の歴史においては日露戦争後（1905年）から昭和20年（1945年）の敗戦までは突然変異的におかしな国家になっていた。太平洋戦争後はまた明治期のよい日本に戻り、繁栄を続けた。
　以上が司馬史観の骨子である。特に敗戦までの昭和の20年間の歴史のみが悪い時代であった、とするのが司馬史観の眼目である。さらに司馬史観の特徴は進歩的史観のように太平洋戦争の勃発の原因を特定の権力者のみに帰することなく、国民全体の責任としていることである。
　昭和40年代（1965年以降）に入り、司馬氏の代表作『坂の上の雲』が発表された後、特にこの司馬史観は日本を支えるサラリーマン層に支持された。「明治は明るいよい時代であった」という彼の史観は進歩的史観に毒されて育った世代からは熱烈に歓迎された。

３．自由主義史観

最近になり、さらに自由主義史観というものが出てきた。藤岡信勝や渡部昇一の考えなどがその代表である。この史観の骨子では明治以来の日本というのは一貫して悪いものではなかった、日露戦争は無論のこと太平洋戦争もまた防衛戦争であった、ということになる。無論1911年の韓国併合も諸外国が認めた合法的なものであり、当時の世界情勢から判断すればやむを得ない行為であったとする。南京大虐殺などは当然ながら存在しない、盧溝橋事件は中国共産党の挑発である、となる。
　この自由主義史観が最近になって出てきた背景にはやはりソ連の崩壊などにより、左翼勢力が弱まってきたことがあるだろう。戦後、日教組を始めとする強い左翼勢力に教育現場が牛耳られてきた。しかし世界での共産主義勢力の退潮傾向により、そうした歴史教育に不満を抱いていた層の不満が一挙に攻勢に出てきた、と見るべきであろう。すなわち最近になっていきなりこうした史観が生まれたのではなく、潜在していた史観が顕在化してきた、と見るべきではないかと思う。今後この自由主義史観がどれほど勢力を拡大するかは不明であるが、明らかに戦前の皇国史観とは一線を引いているようである。

**④司馬史観のあらわれとしての『竜馬がゆく』『坂の上の雲』『花神』**

1. 『竜馬がゆく』

　『[産経新聞](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%A3%E7%B5%8C%E6%96%B0%E8%81%9E%22%20%5Co%20%22%E7%94%A3%E7%B5%8C%E6%96%B0%E8%81%9E)』夕刊に[1962年](https://ja.wikipedia.org/wiki/1962%E5%B9%B4%22%20%5Co%20%221962%E5%B9%B4)[6月21日](https://ja.wikipedia.org/wiki/6%E6%9C%8821%E6%97%A5%22%20%5Co%20%226%E6%9C%8821%E6%97%A5)から[1966年](https://ja.wikipedia.org/wiki/1966%E5%B9%B4%22%20%5Co%20%221966%E5%B9%B4)[5月19日](https://ja.wikipedia.org/wiki/5%E6%9C%8819%E6%97%A5%22%20%5Co%20%225%E6%9C%8819%E6%97%A5)まで連載し、1963年から1966年にかけ、[文藝春秋](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%87%E8%97%9D%E6%98%A5%E7%A7%8B%22%20%5Co%20%22%E6%96%87%E8%97%9D%E6%98%A5%E7%A7%8B)全5巻で刊行された。[1974年](https://ja.wikipedia.org/wiki/1974%E5%B9%B4%22%20%5Co%20%221974%E5%B9%B4)に[文春文庫](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%87%E6%98%A5%E6%96%87%E5%BA%AB%22%20%5Co%20%22%E6%96%87%E6%98%A5%E6%96%87%E5%BA%AB)創刊に伴い全8巻で刊行、単行・文庫本ともに改版されている。本作品は司馬の代表作の一つで同時に維新の[英傑](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8B%B1%E9%9B%84%22%20%5Co%20%22%E8%8B%B1%E9%9B%84)として、今日に至る竜馬像を確立した作品である。『司馬遼太郎 歴史のなかの邂逅（5）』（中公文庫、2011年）に作品随想を収録している。『竜馬がゆく』の執筆のきっかけは産経新聞時代の後輩にあたる高知県出身の渡辺司郎（元産経新聞社常務大阪代表、元大阪市教育委員会委員長）が遊びに来て 「これは仕事で言ってるのではなくて、自分の国の土佐には坂本竜馬という男がいる。竜馬を書いてくれ」と依頼されたことがきっかけになっている。依頼された当初は、司馬自身その気がなかったが、後日他の小説の資料あつめをしていると不思議と坂本竜馬が出てきて親しみを覚え、本格的に坂本竜馬を調べてみようと思うようになったと述べている。司馬は本作品の執筆にあたり、[神田神保町](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A5%9E%E7%94%B0%E7%A5%9E%E4%BF%9D%E7%94%BA%22%20%5Co%20%22%E7%A5%9E%E7%94%B0%E7%A5%9E%E4%BF%9D%E7%94%BA)の[神田古書店街](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A5%9E%E7%94%B0%E5%8F%A4%E6%9B%B8%E5%BA%97%E8%A1%97%22%20%5Co%20%22%E7%A5%9E%E7%94%B0%E5%8F%A4%E6%9B%B8%E5%BA%97%E8%A1%97)の複数店に依頼し、ワゴン車1台分の当時1400万円相当の古書・古文書を集め購入したという。（ウィキペディア）

映像化　1965年（MBS）演中野誠也　1968年（NHK大河ドラマ）演北大路欣也　ほかに竜馬を主人公・登場人物とした1974年（NHK大河ドラマ『勝海舟』）演藤岡弘、1974年（ATG『龍馬暗殺』監督黒木和夫）演原田芳雄、近年には2010年（NHK大河ドラマ『龍馬伝』）演福山雅治

２．『坂の上の雲』

　[明治維新](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%98%8E%E6%B2%BB%E7%B6%AD%E6%96%B0%22%20%5Co%20%22%E6%98%8E%E6%B2%BB%E7%B6%AD%E6%96%B0)を成功させて[近代国家](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%BF%91%E4%BB%A3%E5%9B%BD%E5%AE%B6%22%20%5Co%20%22%E8%BF%91%E4%BB%A3%E5%9B%BD%E5%AE%B6)として歩み出し、[日露戦争](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E9%9C%B2%E6%88%A6%E4%BA%89%22%20%5Co%20%22%E6%97%A5%E9%9C%B2%E6%88%A6%E4%BA%89)勝利に至るまでの勃興期の[明治日本](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%98%8E%E6%B2%BB%E6%99%82%E4%BB%A3%22%20%5Co%20%22%E6%98%8E%E6%B2%BB%E6%99%82%E4%BB%A3)を描く。『[産経新聞](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%A3%E7%B5%8C%E6%96%B0%E8%81%9E%22%20%5Co%20%22%E7%94%A3%E7%B5%8C%E6%96%B0%E8%81%9E)』夕刊紙上で、[1968年](https://ja.wikipedia.org/wiki/1968%E5%B9%B4%22%20%5Co%20%221968%E5%B9%B4)4月から[1972年](https://ja.wikipedia.org/wiki/1972%E5%B9%B4%22%20%5Co%20%221972%E5%B9%B4)8月にかけて連載された。文藝春秋社から刊行。

　司馬の代表作の一つとして広く知られ、長編作品としては初めての近代物である。維新を経て新国家に生まれ変わった日本が、欧米[列強](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%88%97%E5%BC%B7%22%20%5Co%20%22%E5%88%97%E5%BC%B7)にさかんに学びながら近代国家としての体制を整えてゆき、[日清戦争](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%B8%85%E6%88%A6%E4%BA%89%22%20%5Co%20%22%E6%97%A5%E6%B8%85%E6%88%A6%E4%BA%89)など幾多の困難を乗り越えて、ついには日露戦争において[ロシア帝国](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AD%E3%82%B7%E3%82%A2%E5%B8%9D%E5%9B%BD%22%20%5Co%20%22%E3%83%AD%E3%82%B7%E3%82%A2%E5%B8%9D%E5%9B%BD)を破るまでを扱う。旧[伊予国](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BC%8A%E4%BA%88%E5%9B%BD%22%20%5Co%20%22%E4%BC%8A%E4%BA%88%E5%9B%BD)（[愛媛県](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%84%9B%E5%AA%9B%E7%9C%8C%22%20%5Co%20%22%E6%84%9B%E5%AA%9B%E7%9C%8C)）[松山](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%BE%E5%B1%B1%E5%B8%82%22%20%5Co%20%22%E6%9D%BE%E5%B1%B1%E5%B8%82)出身で、日本陸軍における騎兵部隊の創設者である[秋山好古](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A7%8B%E5%B1%B1%E5%A5%BD%E5%8F%A4%22%20%5Co%20%22%E7%A7%8B%E5%B1%B1%E5%A5%BD%E5%8F%A4)、その実弟で海軍における海戦戦術の創案者である[秋山真之](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A7%8B%E5%B1%B1%E7%9C%9F%E4%B9%8B%22%20%5Co%20%22%E7%A7%8B%E5%B1%B1%E7%9C%9F%E4%B9%8B)、真之の親友で明治の文学史に大きな足跡を残した俳人[正岡子規](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AD%A3%E5%B2%A1%E5%AD%90%E8%A6%8F%22%20%5Co%20%22%E6%AD%A3%E5%B2%A1%E5%AD%90%E8%A6%8F)の3人を主人公に、彼らの人生を辿りながら物語が進行する。

　本作は司馬の著作の中でも特に議論を呼んだことで有名で、明治という時代そのものに対する高評価、日露戦争を一種の[自衛戦争](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%87%AA%E8%A1%9B%E6%88%A6%E4%BA%89%22%20%5Co%20%22%E8%87%AA%E8%A1%9B%E6%88%A6%E4%BA%89)であると捉えた司馬の史観、旅順攻撃を担当した乃木希典およびその配下の参謀たちが能力的に劣っていたために無用の犠牲を強いたとする筆者の見解については、いまだに賛否両論がある。[藤岡信勝](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%97%A4%E5%B2%A1%E4%BF%A1%E5%8B%9D%22%20%5Co%20%22%E8%97%A4%E5%B2%A1%E4%BF%A1%E5%8B%9D)はこの作品をきっかけとして[自由主義史観](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%87%AA%E7%94%B1%E4%B8%BB%E7%BE%A9%E5%8F%B2%E8%A6%B3%22%20%5Co%20%22%E8%87%AA%E7%94%B1%E4%B8%BB%E7%BE%A9%E5%8F%B2%E8%A6%B3)を標榜するようになったと語り、歴史書・伝記の「読書アンケート」でも一貫してトップクラスの人気を獲得している。（ウィキペディア）

映像化　2009年～2011年（NHKスペシャルドラマ）演　本木雅弘　阿部寛　香川照之

３．『花神』

　日本近代兵制の創始者・[大村益次郎](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E6%9D%91%E7%9B%8A%E6%AC%A1%E9%83%8E%22%20%5Co%20%22)（村田蔵六）の生涯を描く。[1969年](https://ja.wikipedia.org/wiki/1969%E5%B9%B4%22%20%5Co%20%221969%E5%B9%B4)10月1日から[1971年](https://ja.wikipedia.org/wiki/1971%E5%B9%B4%22%20%5Co%20%221971%E5%B9%B4)11月6日まで『[朝日新聞](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%9D%E6%97%A5%E6%96%B0%E8%81%9E%22%20%5Co%20%22%E6%9C%9D%E6%97%A5%E6%96%B0%E8%81%9E)』夕刊に、633回にわたって連載された。冒頭で作者司馬に向け、緒方家の血を引く謹厳な老学者（[緒方富雄](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B7%92%E6%96%B9%E5%AF%8C%E9%9B%84%22%20%5Co%20%22%E7%B7%92%E6%96%B9%E5%AF%8C%E9%9B%84)）が、花やぐ世界を寂しく生きた男と[シーボルト](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%97%E3%83%BB%E3%83%95%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%84%E3%83%BB%E3%83%95%E3%82%A9%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%82%B7%E3%83%BC%E3%83%9C%E3%83%AB%E3%83%88%22%20%5Co%20%22%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%97%E3%83%BB%E3%83%95%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%84%E3%83%BB%E3%83%95%E3%82%A9%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%82%B7%E3%83%BC%E3%83%9C%E3%83%AB%E3%83%88)の娘[楠本イネ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A5%A0%E6%9C%AC%E3%82%A4%E3%83%8D%22%20%5Co%20%22%E6%A5%A0%E6%9C%AC%E3%82%A4%E3%83%8D)との心の通いは恋だったのかという独言を引用し作品が始まっている。

　現行版は[新潮文庫](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%B0%E6%BD%AE%E6%96%87%E5%BA%AB%22%20%5Co%20%22%E6%96%B0%E6%BD%AE%E6%96%87%E5%BA%AB)全3巻（初版1976年、改版2002年）と、『司馬遼太郎全集　30・31』（[文藝春秋](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%87%E8%97%9D%E6%98%A5%E7%A7%8B%22%20%5Co%20%22%E6%96%87%E8%97%9D%E6%98%A5%E7%A7%8B)）。なお初刊は[1972年](https://ja.wikipedia.org/wiki/1972%E5%B9%B4%22%20%5Co%20%221972%E5%B9%B4)に[新潮社](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%B0%E6%BD%AE%E7%A4%BE%22%20%5Co%20%22%E6%96%B0%E6%BD%AE%E7%A4%BE)（全4巻）で出版された（1993年に新装改訂版（全1巻））司馬は本作に先行し[1964年](https://ja.wikipedia.org/wiki/1964%E5%B9%B4%22%20%5Co%20%221964%E5%B9%B4)に、大村を主人公に、短編作品『鬼謀の人』を書いている。(同作は『人斬り以蔵』、新潮文庫ほか)に収録。（ウィキペディア）

映像化　1977年（NHK大河ドラマ）演　中村梅之助

**⑤史観としての司馬史観、あるいはマーケティング**

1. 司馬遼太郎（1923年8月7日～1996年2月12日）はもともと産経新聞記者（1948年～1961年）で、左翼思想からは離れたところにいた。

２．司馬史観の命名者尾崎秀樹（1928年～1999年）はゾルゲ事件の秀実の異母弟で共産党員。大衆文学評論家。命名された1972年は浅間山荘事件があった左翼退潮元年で、『坂の上の雲』における明治時代称揚には微弱にせよ皮肉な意味合いがあった。本作解説では英雄ばかりで民衆がいないとも述べている。

３．もとは少々皮肉を含む意味を帯びていた司馬史観という用語は、産経新聞・朝日新聞・文藝春秋社・新潮社などにより、いつしかどこまでも肯定的に使われることになった。

４・司馬の立場は「明治はよくて昭和はだめ」というものだったから、左右両派とも最低半分は承認できることになる。そのため明確な反対勢力は少数となって、メディアとしても宣伝しやすかった。

1. 発表紙や版元に恩義のある歴史学者までも付和雷同したために、あたかも史観として成立するかのような印象が出来上がった。けれども、作品内部に「歴史の見方をきめるもの」としての史観の根拠は見いだせない。

６．司馬史観とは発表紙や版元によるマーケティングのための用語として扱われるべきである。